



N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414
Lincoln NE 68506 USA
www.nsdapao.org

#1149

23.03.2025 (136)

悪の天才の教育

ゲルハルト・ラウク著

パート15

クロアチアを訪ねて

旧共産圏の衛星政権が分裂し、戦争が勃発した。特にクロアチアでの戦争は、かつての鉄のカーテンの両側の反体制派を大いに興奮させた。多くの国から志願者が殺到した。国際的な旅団が結成された。その旅団を率いたのは、米国に数年間住み、働いていた生粋の戦争の英雄だった。

法的な理由から、わが米軍基地とその米国民は、外国の戦争に巻き込まれないよう細心の注意を払わなければならなかった。もちろん、ジャーナリズムは別として。

当然、私は彼が英語を話すと思っていた。しかし、彼に会ってみると、それは間違いだった！私たちは通訳を介してコミュニケーションを取らなければならなかった。しかし、この通訳も英語を知らなかった。かろうじてドイツ語を話し、第二次世界大戦時の古い辞書を使っていた。

私たちはボランティアたちから戦況報告やビデオ映像を受け取った。私たちはその報告書を公表し、ビデオ映像を友好的なテレビ局に伝えた。

これには戦闘についての直接の証言も含まれていた。また、虐殺現場での切断された死体についての簡単な記述もあった。この光景に兵士たちは大きな怒りを覚え、酒に酔いたいという強い欲求に駆られた。

あるビデオクリップをよく見ると、入ってきた戦車の砲弾がカメラマンに当たりそうになっているのがわかる！大きな “ペンキの染み” もあった。実はこれは、対戦車地雷に近づきすぎた哀れな悪魔の唯一の残骸だったのだ。

いまや崩壊しつつある東欧ブロック、すなわちハンガリーの政府テレビ局が、一石二鳥を狙ったのだ。私の記憶が正しければ、政府はまだ厳密には「共産主義」だった！しかしこの頃には、イデオロギーよりも民族性が大きな役割を果たしていた。まるで、共産主義のイデオロギーを実際に信じた人がいたかのように。

当初の計画では、国際旅団の基地で私と面談することになっていた。実際、本格的な軍事閱兵式が計画されていた。重装備の兵士や戦車までが、主賓である私の前で行進するのだ！

政府の官僚主義による遅れがこの計画を台無しにした。あと1、2週間早ければ、成功させることができただろう！

クリスチャン・マルコーシは私に、政府系航空会社ではなく民間航空会社のみを利用するよう助言していた。民間航空会社の方が、私を捕らえるために民間旅客機を他国へ迂回させようとする政治的圧力を受けにくいと考えたからだ！

ようやく到着した私は、首都にある旅団の中央管理棟に直行した。しかし、そこは閉鎖されたばかりだった。

直前になって政治的な複雑さが生じたのだ。共産主義は確かに死につつあったが、まだ完全に死んで埋葬されたわけではなかった！共産主義のプロパガンダは、反共産党の新政府でさえ神経質にさせた。そのような見世物は一切禁止された。国際旅団さえ解散させた。戦争は多かれ少なかれ終わっていた。停戦が宣言され、和平交渉によって戦争もまもなく正式に終結することが期待されていた。

連絡が再開され、新たなプランが練られるまでには、多少の混乱と遅れがあった。

私はその時間を使って、新しい国の首都を広範囲にハイキングした。美しい街だった。人々はとてもまともだった。NATO軍に奉仕する売春婦は他国から輸入しなければならなかった。貧しさにもかかわらず、現地の女性たちはこのために身を低くすることを拒んだ。（戦争で税金は50%、靴一足が一ヶ月分の給料だった）。

私のお気に入りのレストランは、中庭にひっそりと佇んでいた。周囲の

建物を通り抜け、目立たないトンネルを通過して行くことができる。客が少ない理由を尋ねると、誰も外食するお金を持っていないからだと言われた。最後の晩、私は最後の現地通貨をウェイトレスや厨房のスタッフたちに渡した。帰り際に振り返ると、彼らはまだそこに立っていた。彼らは満面の笑みで手を振って別れを惜しんでいた。

私は旧友に会った。彼は旅団の将校で、今でも誇らしげに軍服を着ていた。このフランス人はちょっとした戦争冒険家だった。彼はイラクにいたことがあり、東部ブロックの政治警察本部を急襲した。彼の運転手はこの戦争でRPGに撃たれて死んだ。

彼は自分の冒険と他の旅団員の冒険を語った。

ある外国人志願兵がパスポートを持たずに国境に到着した。彼は国境警備隊に、旅団に入って祖国のために戦いたいと説明した。彼の唯一の身分証明書はNSDAP/AOの会員証だった！国境警備隊はそれを認め、彼に国境を越えさせた。

軍事訓練を受けたことのない2人の志願兵が前線キャンプに到着すると、それぞれにライフルが手渡され、こう言われた：30分以内に使い方を覚えろ。その間に敵の攻撃が予想される。

ある村は放棄されていた。飼い主に置き去りにされた犬たちが群がっていた。数日後、彼らは空腹で危険な状態になった。私たちは彼らを射殺しなければならなかった。

私たちは道路封鎖の重機関銃陣地を守っていた。とても暑かった。誰かがソフトドリンクを探しに行こうと言った。数マイル離れた丘の頂上を越えた。眼下には海が広がっていた。まるで戦争などなかったかのように、市民が浜辺で日光浴をしていた。私はソフトドリンクを見つけ、検問所に戻った。戻ってから、小競り合いがあったことを知った。隊員のひとりが負傷した。

海までドライブすることも考えた。でも遠すぎた。しかも、道路地図には、どの地域がどの軍隊に占領されているのかが書かれておらず、役に立たなかった！

私は数年前、アメリカでその負傷者に会ったことがある。幸い、彼の傷は命に別状はなかった。

その結果、ミーティングは2組に分かれた。ひとつは外国のテレビ局のクルーと私。歴史的な場所でのインタビューも含まれていた。もうひとつは、元指揮官を含む、現在は解散しているフォーメーションのメンバー個人と私の会談だった。この2組目の会談のメディア取材は厳しく禁じられていた！

NATO平和維持軍が対立する両軍を分断する最前線にも足を運んだ。

フランス人の友人の将校は、まだ軍のIDを持っていた。彼は私たちをどこへでも連れて行ってくれた。彼は、このIDはすぐに使えなくなるだろうと悲しそうに言った。ともあれ、首都と前線を結ぶ最後の検問所を通過することができた。地元の警察署長が私たちを本部に案内してくれた。

チーフは私を指差し、そして窓を指差した：先月、あなたの椅子に座っていた男性がスナイパーに殺されました。弾丸はこの窓から飛んできた。スナイパーは向こうの木にいた。

彼は、敵兵は一般的に警察官を殺さないとコメントした。

そして、私たちを前線に連れて行くと申し出た。彼は私たちに、自分の道をしっかり辿るように諭した。迷い込んだ誰かが最近、地雷で死んだのだ。道は、高い庭の塀や荒廃した家々の穴を抜けて続いていた。私は記念に迫撃砲の破片をいくつか拾った。

そしてついに、敵地との間にある最後の細い未舗装道路とフェンスまで、目と鼻の先まで迫った。装甲兵員輸送車が道を走っていた。NATOの壕と検問所はほんの数メートル先にあった。まだ占領されている敵軍の兵舎が目の前にあった。

その後、彼は私たちを家に連れて行き、家族に会わせた。私たちは自家製のアルコール飲料、おそらくブランデーを飲んだ。

彼の家族は魅力的だった。戦場のど真ん中で日常生活を送っている人々を見るのは驚きだった。彼は、たった1ヶ月の間に何千発（！）もの迫撃砲弾が彼の街に降り注いだと話してくれた。破壊された家々は、持ち主の生涯の仕事と夢を象徴していることが多かった。

帰り際、とても興味深く、有意義な旅だったと振り返った。しかし、自分だけの軍事パレードを見逃したことは残念だった！

ロサンゼルス・タイムズ 紙は、帰国後数時間で私にインタビューの電話をかけてきた。このインタビューは一面に掲載された。

* * * * *

1995年、私は断れないチャンスを与えられた。私が不在だったにもかかわらず、アメリカのスタッフはとてもうまくやっていた。そのため、私は当初の予定よりも多くの時間をヨーロッパで過ごすことになった。

第7章

私の誘拐

アメリカ政府の協力

米国と外国の政府関係者は、長期にわたって非常に緊密に協力し合った。彼らの目的は、憲法修正第1条を回避することだった。彼らは、アメリカ人反体制派、つまり彼らの側近となった私を無力化したかったのだ。

それを証明するドイツ政府の文書が何千ページもある。正式な調査を正当化するのに十分な証拠があると思う。だが、期待はしていない。

私はこのことを米国務省の役人に面と向かって説明した： 私たちは、少なくとも何人かの米政府関係者の名前さえ知っている： 言論の自由の敵と一緒に寝れば、遅かれ早かれわかることです。彼らは何でも記録する。遅かれ早かれ、誰かが我々にリークするだろう。私たちの抵抗運動は、政府内部に友人がいなければ、ここまで長く生き延びることはできなかった。

- 役人は心配そうに言った！

これは私や私の信念の問題ではない。外国政府に管轄権を主張されることなく、ここアメリカで言論の自由を実践するすべての米国市民の権利についてだ。そして、米国政府の役人がそれを許すこともない。それを助けることさえ！

注： ドイツとフランスは、米国を拠点とするウェブサイトが自国内で「アクセス可能」として、その管轄権を公に主張している！

これは私たち全員の脅威だ！

外国政府に盗聴された米国の電話

ドイツの政治警察は、アメリカ国内の電話回線を盗聴しようとしていた。

その政権のアメリカCIAのカウンターパートを頼ったが、断られた。そして、アメリカの大統領府のカウンターパートに、自分たちのために介入してくれるよう要請した。この要請は受け入れられた。その諜報機関は協力を命じられた。

しかし、このようなことはかつてなかった！技術的にはまだ問題があった。この技術的な問題が解決されても、彼らは私たちの回線を常時2本しか盗聴できなかった。この監視は数ヵ月後に中止された。結果があまりにも貧弱だったからだ。今にして思えば、実際よりももっと活用すべきだったと思う。

もちろん、私たちは常に電話が盗聴されているという前提で動いていた。そしてこの情報は最終的に外国政府に届くことになる。

以上のことは、私たちが政府の膨大な資料を入手したときに確認された。その中には、実際に盗聴された私の電話での会話の記録も含まれていた。

日付を見比べれば、これが私に対する逮捕状の発行につながったことは明らかだ。外国政府は私のヨーロッパ到着が迫っていると考えたのだ。実際は、盗聴されているとわかっていた回線での会話によって、意図的にリークされた偽情報だった。

翌年、私が実際にヨーロッパに到着したときには、その令状はすでに失効していた。新しい令状が必要だった。両方の令状の日付がそれを示している。

